

雲のわくころ

小川未明

青空文庫

冬のさむい間は、霜よけをしてやったり、また、日のよくあたるところへ、鉢を出してやったりして、早く芽が頭をだすのを、まちどおしく思ったのであります。

勇吉は、草花を愛していました。

しかし、いくら気をもんでも、その気候とならなければ、なかなか、芽を出し、咲くものでないことも、知っていました。だから、

「早く、春にならないかなあ。」と、灰色に、ものかなしく、くもった冬の空をながめて、いくたび思ったことでしよう。

そのうち、だんだん木々の小枝にも、生氣のみなぎるのが感じ

られ、氷こおりのように、つめたくはりつめた黒い雲くろくもが、あわただしく、うごきはじめて、冬ふゆの去さつていくのがわかりました。そのときは、また、どんなにうれしかったでしょう。

いつのまにか、素焼すやきの鉢はちの中なかにも、庭にわの花はな園ぞのにも、やわらかな土つちをやぶつて、こはく色いろの球きゅう根こんの芽めが顔かおを見みせ、太陽たいようをしたつて、のびようとするのでした。

ある早そう春しゆんの日ひのこと、日ひあたりあたりのいい、寺てらの門もん前ぜんで、店みせをひらいて、草花くさばなの根ねや、苗なえを売うっている男おとこがありました。これを見みた勇ゆう吉きちは、やまゆりの根ねを二つ買かつてかえりました。そして、一つ大おおきいほうを花壇かだんに、もう一つを、小高こたかくなっている、つつじのはえたところへ、うえたのであります。

ちようど、春はるの季節きせつの花はなが、少すくなくなつたじぶん、やまゆりの芽めは、ぐんぐんと、大おおきくなつたのでした。

ところが、ある日ひ、勇吉ゆうきちは、庭にわへ出でて草くさをむしつたり、肥ひりよ料うをほどこしたりするうち、あやまつて、花壇かだんのやまゆりを、ふみつけてしまいました。

「あつ。」と、思おもわずさげんだが、むぎんに、根ねもとから折おれてしまつたので、どうすることもできませんでした。

「かわいそうなことをした。」と、ざんねんがるよりか、むしろ、花はなのはかない運命うんめいを、あわれまずに、いられなかつたのでした。かれは、自分じぶんの不注ふちゆうい意いだつたつぐないとして、あとの一つを大事だいじにしました。やがて、それは、初夏しよかの空そらの下したで、白しろい清きよらか

な感じかんのする香気こうきの高い花はなを開ひらきました。日ひの光ひかりがてらすと、さながら銀ぎんでつくられた花はなのごとく、かがやかしく見みえたのです。たちまち、この花はなのみつを吸すおうとして、ちようや、はちが、どこからか飛とんできて、花はなのまわりに集あつまりました。

「よく、みごとに咲さいたなあ。」と、ふらりと、となりのおじさんが、庭にわへやつてきて、やまゆりの花はなを見みてほめました。

「いまごろ、山やまにのぼると、谷たにへかけて、こんなのが、たくさん、みごとに咲さいている。勇ゆうちゃんは、こんどの休やすみに、私わたしといっしよにいつてみないか。」と、おじさんが、さそつたのでした。

「山やまへいくんですか。」と、かれは、胸むねをおどらせながら、おじさんの顔かおを見みましたが、すぐには、決けつしかねて、返へんじ事ができな

つたのでした。そのわけは、自分が、まだ遠いところへ、いった
 経験けいけんがなかったからです。

「なに、たいして、歩あるかなくても、すぐ山やまや谷たにのあるそばまで、
 いけるのだよ。バスと電車でんしゃに乗りさえすれば、朝あさはや早く出でかけ
 れば、らくに晩ばんがたままでに、帰かえつてこられるのだ。」と、おじさ
 んは、わらいながらいいました。そして、

「毎年まいとし、いまごろになると、ちよつとでも、山やまへいくか、また、
 釣りつりぎおをさげて、どこか遠とおくの川かわに出でかけなければ、気きがすま
 ないのだよ。」と、おじさんは、いうのでした。

「おじさん、ぼくも、大おおきくなつたら、どこか、知しらない高たかい山やま
 や、深ふかい谷たにのあるところへ、いつてみたいと思おもいます。」と、勇ゆう

うきち

吉は、冒険にたいする勇猛心と、かぎりない自然の美にた

いして、あこがれながらいいました。

「それが、昔なら、歩かなければ、どこへも、いけなかつたのが、

いまは便利になつて、たいていのところへは、乗り物で、そばま

でいけるし、飛行機に乗れば、外国でも、土をふまずに、海や

山をこして、飛んでいくことができるのだから。」と、だれでも、

その気さえあれば、なんでも実現されるのが、ゆかいでたまら

ぬというふうにおじさんは、ほがらかにいって、笑うのでした。

かれは、庭の花のお友だちである、美しいやまゆりの咲くところ

も見たかつたし、また、おじさんが、谷川であゆを釣るのも

見たかつたので、つれていってもらふように約束しました。

そのときから、すうじつ数日の後のことでした。

「勇ちゃん、いつも、いえまえ家の前に立つと、にしほう西の方に、とお遠く、あおやま青い山が見えるだろう。この山やまなんだよ。」と、バスの窓まどから、だんだんちか近くにせまりつつあった、あおあお青々と林はやしのしげる山やまをさして、おじさんはいいました。

ゆうきち勇吉は、なるほど、でんしゃ電車のに乗り、またバスに乗のつたりして、いつしか、とお遠くまできたものだと思おもいました。はるか下したの方ほうをのぞくと、おお大きな岩がんせき石いしにたにがわくだけながら、しろ谷川たにがわが白くあわだつてなが流ながれていました。

とうてい、まち町といわれそうもない、四、五軒けんばかり店みせのならんだ、バスの停ていりゆうじょう留場りゅうじょうのあるところまできて降おりると、その一

軒^{けん}には、パチンコの看板^{かんばん}が、かかっています。

「こんなところにも、パチンコ屋^やがあるんですね。」と、かれは、おどろきました。だれが、こんなところへ遊び^{あそび}にくるのだろうと、想像^{そうぞう}がつかなくったからです。

「パチンコとか、富^{とみ}くじとか、みんな、ばくちみたいなものだからな。悪い^{わる}ことというものは、だれでも、おもしろがつて、まねするもんだ。都会^{とかい}で、これがはやってもうかると聞^きくと、すぐ、いなかでもやりだす。ここへくるまでに、たくさん、いなかの子^こ供^{ども}を見^みたろう。ちよつと、ようすが、いなかの子^ことは思^{おも}えまい。いいこと、わるいこと、なんでも都会^{とかい}のふうをまねる、おそろしいことだよ。」と、おじさんはいいました。

そういえば、昔むかしの絵えにかかれた、さびしそうな景色けしきや、笠かさや手てぬぐいをかぶつて働く百姓はたらの姿しよすがたや、みじかいつつそでの着物きものをきて、ぞうりや、げたをはいた子供こどもなどは、どこにも見みられなかつたのでした。

「さあ、このへんから、川原かわらへはいるのだが、石ころいしがあつてあぶないから、よく気きをつけておいで。」と、おじさんは、先さきになつて、ささやぶの間あいだをわけてすすみました。

勇吉ゆうきちは、そのあとからついていきました。しばらくすると、きゆうに流れながれが音おとをたてている谷川たにがわのほとりに出でました。バスの窓まどから下したに見みえたのは、この川かわだったのです。

「あのあたりが、いいだろう。」と、おじさんが指ゆびさした、半はんぶ

分^ん浅^あ瀬^せにのめり出^でている大^{おお}きな石^{いし}の上^{うえ}で、二^{ふた}人^{たり}は、休^{やす}むことに
しました。

「いい景色^{けしき}ですね。」と、勇^{ゆう}吉^{きち}は、あたりを見^みまわしながら感^か
歎^{んたん}しました。

「ほら、ごらん。あのがけのところに、やまゆりが咲^さいているか
ら。」と、おじさんが、いったので、そのほうを仰^{あお}ぐと、頂^{ちようじ}
上^{よう}から、ほそい一^{ひと}すじの滝^{たき}がおちて、そのしぶきを、あびなが
ら、白^{しろ}い花^{はな}が咲^さいていました。

かれは、自^じ分^{ぶん}の家^{いえ}の庭^{にわ}に咲^さいている、やまゆりを思^{おも}い出^だしまし
た。

目^めを転^{てん}じると、あぶなげな岩^{いわ}鼻^{ばな}に根^ねをおろした、松^{まつ}の木^きがあ

りました。同じ松ながら、あるものは、安全な平地に根をおろしているし、こうして、たえずおびやかされるものもある。どちらが、はたして幸福だろうかと考えたりしました。

たとえば、雪や、あらしと戦い、けっしてまげずに、昼は小鳥の声を聞き、夜は雲間の星と語るこの松を、どうして、不幸といいきれるだろうかとも思いました。

「勇ちゃん、おべんとうを食べようよ。」と、おじさんは、つつみを開きはじめました。ゆで卵や、やいた魚や、酒のびんなどが、出てきました。

おなか、すいていたので、勇吉は夢中で食べていると、その間に、おじさんは、用意してきた、釣りざおのひもを解き、

あゆを釣る準備をしました。

すずしい風が、ひたひたと、たえず流れの上を吹いていたのに、どこからか、においをかぎつけて飛んできたものか、一ぴきのはえが、そばの石にとまって、食べ物^{もの}のありかをさがしていました。また、他のほうからは、まったく見なれない黒色のくもが、おそらく、このあたりにすむのであるうが、どうして、水をわたつたものか、冒険をおかして、やはり食べ物^{もの}をねらっているのでした。勇吉は、虫たちの敏感^{びんかん}なおにおどろき、かつ、その真剣^{しんけん}なのを、きみ悪くさえ感じました。これを気づかず^きにいた、おじさんに告げると、

「はあ、めつたに、こんなところで、ごちそうのにおいなんか、

あることがないから、そりや、虫どもは、さがすのに、血まなこ
だろうよ。虫だつて、人間と同じことで、生きることにかわり
がないし、容易でないのだ。」と、おじさんは、はしをうごかし
ながらいいました。

そう聞くと、かれは、このとき、くもや、はえを、追いはらい
はしたけれど、たたきつけて、殺す気には、なれなかつたのです。
それから、しばらく、勇吉は一人で、石から石へわたったり、
また水ぎわを、あちらへいつたり、こちらを散歩したりしました。
そして、また、もとの場所へもどつてくると、ちようどおじさん
は、さおをしまいながら、

「このあたりは、便利なもので、よく人が釣りにくるとみえて、

魚がすれていて、なかなか、えさにだまされない。もつと奥のほうへいかなければ、かかりそうもないから、今日は、よすことにしよう。」と、勇吉に向かつて、いいました。

「おじさん、ねむの花が、きれいに咲いていましたよ。」

「ああ、いまは、ねむが盛りのはずだ。」

「さつき、やまぼとが、遠くで鳴いていましたよ。」

「かつこうは、きかなかつたなあ。すこし奥へはいると、ほととぎすも鳴いているだろう。」

「おじさん、奥のほうは、ぼくにはいけそうもないところなんですか。」と、勇吉が聞きました。

「しかし、今日は、時間がないから、また、出なおすことにしよ

うよ。」と、おじさんは、答こたえて、そのかわり、帰かえりに、見晴みはらしのいいところで、あちらの山やま々を見みせてやろうといったので、勇ゆう吉きちは喜よろこびました。

かれは、それよろこに喜かんびを感じながらも、ここへは、いつまたこられるだろうかと思おもうと、なんとなく、川原かわらにわかれるのが、おしまれたのでした。

やがて、けわしい、細ほそい道みちを、息いきをきらして上のぼりました。

「お百姓しやうさんも、こんな坂さかの上うえまで、畑はたけを作つくりにくるのでは、さぞ骨ほねがおれるだろう。」と、おじさんは、足あしを休やすめて、左さ右ゆうをながめていました。

「まだ、あんな高たかいところにも、おじさん、畑はたけがありますよ。」

と、勇吉は、そぼの山腹にある、耕された高地を指さしました。

もう、その山のいただきは、下から見ると、雲に接してしました。この坂の上から、前方をのぞむと、山また山の、えんえんとしてつらなる波が、ながめられました。そして、近くにせまる深い溪谷からは、煙のように、白い霧がたち上つていました。「あの高い山には、まだ、雪があるな。」と、かれは、氷をけずつたような、先のとんがった、かがやく峰に見とれていました。「あの峰が、不動が岳というので、いままでに、あのいただきへ、上りきつたものは、何人もないとの話だ。」と、おじさんは、勇吉とならんで立ちながら、山のほうを見て、説明しました。

「そんなに、けわしくて、だれにも上れないの。」と、勇吉は聞き返しました。

「なんでも、昔、十二、三になつたばかりの、孝行のむすこが、医者が見はなした母親の病気を、なおしたい一心で、不動尊に願をかけて、あの頂上まで、お水をもらいに上つたことがある、聞いたが。」

おじさんのこの話は、勇吉の胸に重くのこつて、もうほかのことには気がむかず、ついに、かれをだまらせてしまいました。朝出かける時分には、人間の発明力や科学の力に、おどろきを感じたのであつたが、帰るときには、どれだけ愛し真心をかたむけつくしても、永遠に引きとどめられないものがある

人生じんせいのはかなさを、知しつたのでした。

二人ふたりが、自分じぶんたちの町まちについたころ、もう日ひはくれかけていました。西にしの方ほうの空そらは、うす赤あかく色いろづいて、その下したには、紫むらさき色いろの山やま々やまが、高たかく低ひくく、くつきりと、姿すがたを浮うかび出だしていました。

このごろは、日没にちぼつ前まえになると、きまつて大空おおぞらに、雲くもがわくのでした。ときどき、雷かみなりが鳴なって、雨あめがふりそうに見みえながら、夜よるは、また、一ぺん片くもの雲くもすらなく、晴はれ晴ばれと晴はれ上あがるような、日ひでりがつづきました。

そんなときは、足あしばやに、秋あきのくるけはいが感かんじられたのです。勇吉ゆうきちは、毎まい日にち、庭にわのやまゆりの花はなへきて、その茎くきにとまる、とんぼのあるのを知しっていました。

この未知みちの友ともだちどうしは、たがいに気きが合あつて、人間にんげんなどにかかわりのない、美うつくしいまぼろしの世界せかいのことを、話はなしているのだとも思おもわれました。

ところが、一日いちにち、花はなは、いとなみおえて、ちつてしまいました。とんぼは、いつもの時刻じこくに飛とんできたが、花はながないのを、どう感かんじたか、ただのこつた茎くきにとまっていつまでも、じつとしていました。

そのうち、雨あめがふり出だしました。雨あめは、だんだんはげしくなつて、夜よるまでふりつづきました。

あくる朝あさ、勇吉ゆうきちは、起おきて小ぶりになつた庭にわを見みると、とんぼは、ぬれながら、じつとして、やはり同おなじところに止とまってい

ま
し
た。
。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 14」講談社

1977（昭和52）年12月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「うずめられた鏡」金の星社

1954（昭和29）年6月

初出：「小学六年生 5巻6号」

1952（昭和27）年9月

※表題は底本では、「雲《くも》のわくころ」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年6月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雲のわくころ

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>